PL23
.M8K5

湖月抄

行幸

34

Freer Gallery of Art
Washington, D. C.

7152

行幸 卅七 細 巻名以歌号之大原野の行幸なり
河ハしらぬかりしおさくらりせしことを今日はやうよそのひゝら
やまえし 孟同 細 源三十六歳の十二月也三十七歳の二月まで
の事也冷泉院の御代也玉鬘廿二歳也 弄抄同 愚案 後一説
よろしかるべく初音の巻より此巻まで源氏三十六歳也
胡蝶巻の中にしめすよ卅六歳の九月十月十一月等の事まで
こもりて大原野の行幸是十二月のことなり次の年
源氏三十七歳の二月までの事といふべし 細 藏人所より
大原野の行幸といふ説のと御幸といふはいつれたしくみ
ことにもあんし

うちかりしつらぬきしくろく
細 かず勢と源のかぢりがたき
えいかるて経緯りがたと
孟 玉鬘を宮仕にま
いらせんと源氏の思案あり
試楽として源のさき
細 源下にんけまて
いかにていつまらん
との山の人もうり落の事
あはれのことく此事宮仕
おもにけるよ人めづらしさを
ときをとて下になるらで
事あのさきいかにして
いつよりうく人
お前のことはそよう
んとにふ翔まか野山の
あねがあてりそいとた
しうとあら宮を見れえ
人めづらしう息の前ん
おひうり 哢 三同
こゝのにんのひとをいつり
ごしにて 第五の蛍まゝ
まかでとく 三 胡蝶の

くかりしつらぬきしくろうくかいそう のりらん
ことにいかりしあつらひのあかしにせ此よしとすり けん
濃しとそとそ いとおかしのそくれをのさく乃れ
そしくくらてゝまるひて ろくしりんぐ
孟 源のらし 細 内大臣也
されなるれの此しくおまはつしとつけてとと
二内大臣の推量恩のさとまそらん
こゝはくしくもとりうとなりさ夜の
こと純かりし世ぐらしておしく袖しはふれこゝろ
さ夜とさそひぐ夜るすくけるやうる 夜 也
てましあとのあくんまつけれしく此こゝまし
うりやるゝ此かりしく さふそのまうとうりて大
原野の行幸として世まるゝ 冷泉院の野行幸也
ぐと六条院もうりもけれつぐひきさ此つこと

事よ深くおもふとものゝ給ふを、とてもかくても[illegible]ひつ
まはばといひしるし　花
さてやひかへらるゝかやうなる　晄　内大臣のおもふ〳〵のふすを知るひて又源氏の密通をあ
らはしてけるやうなれども[illegible]　細　源氏の密通の義もあらば
おもふことを内の御心によりて世にもれきこえ[illegible]
内大臣の御心ざしにまかせて[illegible]
ひとしかりけれどもすぐれたる人は[illegible]
まつりかりけり

大原野の行幸　花　野行幸ハ仁徳天皇御宇よりはじまりて代々ある事也十二月の例ハ
仁和二年十二月十四日芹川ニ行幸ニ行平中納言そのかみの例にて今の行
幸ハ延長六年十二月五日ニ大原野ニ行幸の例を摸して書り　大略李部王記によりてかけ
るごとし　略記ニ　河　李部王記延長六年十二月五日大原野行幸卯刻上御輿　孟　野行幸
とハ天下の農作を御らんじあそばされて土民を御憐愍のためと　細　花ニ同

朱雀より　細　西の京の大路なり
なり行幸の道つゞきハ上
卿の深き事そ作まり
く西行幸の車例　花
そのまゝにかきてかたり　下略
三　花鳥ニ李部王記ニ云
自朱雀門至五条大路ニ
折至桂河邊ニ上御輿就
輕ニ群臣下馬ス上御輿群
臣乗馬ニ渡ル浮橋ニ為方舟ヲ
梁ス其上敷板ヲ自桂路入野口ニ

まふ。卯の時に出給ふて、朱雀より五条の大　延長之例也　孟　摸非遠使意
日子後决を待と
路を西ざまに折れ給ふ。桂川のもとまで
物見車隙なし。行幸といへど、かならず　細　親王供奉ノ事仁和例也
かうしもあらぬを、けふハみこたち
かんだちめも皆心ことに馬鞍
をとゝのへ、随身馬副の　河　馬副
かたちたけだち、さうぞくをかざり給つゝ　細　今の太政大臣の比ハ左右大臣也
めづらかにをかし。左右大臣、内大臣、
納言よりしもはた、ましてのこらず
つかうまつり給へり。青色のうへのきぬ、えび
ぞめの下がさねを、殿上人、五位六位まで着
たり。雪たゞいさゝかうち散りて、道の　河ニ　延喜四年十月十九日芹川の行幸ニ雪のふりて大鷹を
空さへえんなり。みこたちかんだちめ　川　略之
なども、鷹にかゝづらひ給へるは、めづらしき　河　摺衣の事
狩の御よそひどもをまうけ給。このゑの　三　諸衆の鷹飼ハ[illegible]
鷹飼どもは、ましてよにめなれぬすり衣をみだれ
きつゝ、けしきことなり。めづらしうをかし　三　[illegible]
きことにきほひ出つゝ、その人ともなく、かすか

あをいろのうへのきぬ
細　麹塵也一日晴にハおもて
着る色なり今の六位
蔵人袍葡萄の色する袍也
こゝまでハ五位六位の附ハお
ちかきまで着用しきみぐし
河　一日之晴之装ニ諸臣着ス
麹塵袍ヲ野行幸ノ時左方
鷹飼着ス赤白橡地ノ
摺衣ヲ右方鷹飼ハ着ス
青白橡地摺衣之由競
狩記ニ見えたり　花　李部
王記ニ延長六年大原野ノ
行幸其装束御ハ赤色ノ
袍親王公卿殿上侍臣六
位已上着ス麹塵袍ヲ今案
主上ハ赤色ノ御袍をめし
給まゝ親王公卿已下皆
青色の闕腋袍を着ス

下ぐるゝハそびぞめきに是ハ鷹をとるかゐ人の出立なり
みじかくして工夫ありてさうよ　細　鷹つかふ人ハ皆衣裳をみじかくして改むと云
花李部王記ニ鷹飼親王ハ公卿着スル地摺布衣及ビ袴ヲ或ハ用ユ紫木蘭色綺袴ヲ小襖子餌袋
今案王□の鷹飼の装束ハ布かり衣の摺の紋あるを着て袴も同し或ハ紫木蘭地のきぬ
の袴をもちゆるとなり　袴子ハ下にきる物なりときこゆ　ゑぶくろハ鷹の餌を入る
物也と云　仁和の芹川行幸に行平の中納言の大鷹飼のさうぞく
綺のかりぎぬをきるべし　河　仁和二年芹河行幸ノ日公卿皆着摺衣ヲ下略
ゆゐさらも王□の鷹飼のあそびにしきにつくりてありけるよりおこれるに
ゑの鷹かひ　細　諸衛ハ六府を云也まへにゆるされたるをいふべし　河　今日主鷹司正一
人掌調習鷹犬事　花　諸衛とハ六衛府のことなり　明一
事ニの名のかりひとあり　ぞうたう家の衣裳のいろをきるをかさりあへるべし
うちさらしのりとゝ　細　行幸
のたの随くゝらし　細　ゑり
の宮人へしるし　撿非違使
いれはなるとはし
ゆうらのあかいろ　細　ゑりしの
たりあまハなをとりあ
さかしきあつらかべきなり
まかゝしく　花　延長六
とし十二月十五日大井に行幸ありて

ゝなかり　河　輪ひきさ車之　行幸のくるま
まあられけるもあり。うしろさし　ゑひ河の家車李部王記おなし注
なかりわしゝかゝき車るぞ。輪をなしてひしらか
はゞのも。このましうらさ夜しうふたくさ
らる夜やかりにの。むの心ひめきもとゐ
むすかり。そこだらしいどこつろしたる人の　かえらく
はたゝかゝ猶ともすよ。みぐしのあかめ　下又ほかまへ　俗白物忌也
はぞなりてぞうちしうらさる

上よ志かれ袍より　下襲
うらうきあかなく袍くゝこりしくらめ
わり父ぬしゞ　細　内大臣ハ
此父ぬしぐしも此内まりあ
よ同ならうべきさなりすと
ゝ盃むらくのなる父内大
臣まめもそつけて此後と
なかしかさらなかりとゝ
ハ取ぐるれバそれそりかさ
なりなし
此ことのゝらてゝりりのは
花　昌泰元年野行幸
將曹中之女□車騰ス天顏ヲ
或ハ出車ス身ヲ或ハ懸ル繫ヲ喧々ヲ
見紀納言記ニ
うゝらありやかりしや
細　平生ハを人の人と飛
まさきをありの人こも皆お清
まゝさらく
中か將あのさら此　三羽林の
將ハ喉白きら鶸を常ーして
たまま分て常りもるく
さくにゝらひさらおりし
三　限らとさふ稜のくさの

河　帝範曰人主之體如ニ山岳ノ焉高峻ニシテ而不レ動
りくめよるなそしひ嘆ゆゆづきん人なし。わりち
地らぞとひともまざめをつけなりまされど
きなしくちる袖をさげまさうしふはなの
しまゝれど。限ありしいとくなそれそ
あまく人はそくゝしれとのならうちるは。
歟人ゝわるべくとあくどをゆしてかうあり　細　まをのゆ尿上人ハまそうるぶ
やはりしやるじをふくそこならのさてかう　つきもるさことゝし
さらまで中かねるまよれの廟ゐハ（の）凡人
ハまめてもあくもそきえまさわかさらくは
まざひとまうゆうしぼとまりなる源氏のゝ　盃　帝の孫よくく仰せおりしごとくし
とくの法かざ夜てことりのとくと　こゝ又強そ

ぬるを、あるじのまずらしいけらん。うらじ
けるをめぐらしさたりさはなるふらひて
かりしとふらふらかおそれなるひとつは
ふさげまけらひとしるべい給ふめて
ねるこのかしかひよめすれたまるとけ
どものくこまろるやめてきすじめられ
ととこらもぞらめしくぞまれなるや。それ
いふもかつらて太宰ぬのまさりうとりり
りしめくともふのいま気ひとえ、縁めぞこや
すぐねるにみひとくつまつりてまつりける
くろくひけらまえぞてひと。つさるまじい
ぞてりは女のつくろひしそくうらぬの人ぬあはひ。

はかなくていとほりみすさくしきとけがらはしきは
からふはえみとしすみひとくずりみもしれさこ
のみかりそめの給ふしき、いかがなりおはしむを
やつれくそらろおそしおはしてそらくしきさま
さ御よやしみすひつくさすふさせるれくきつさ
まどらるなどをくべりそてまするれて太宰をさまつらう
まろりけしんぞうれんて。おりしらもあるえん
しきぞ、をするすけるりくて野よあかりしま
しつるそけらしとしめ、太宰のひしつり
まりの家りれさくぞくとをるよしがり
のれまそひるとよめかしあ給ふはくらま、本
波まりれぬこれいくぐ給るらじきましとまつり。

忠平公とて一統の事ども此殿の孝を以てし。三 忠平張をもて指出来にかゝる
さかへけるいとはさくくぞくなるをたとへハやう上の何よ殊しき行の次にまゐるべくもとまゐる
けるのとあるらむ是ハ見るこのよりとさうけるが此所まそさうりしく敬め是をらるし比をその
筆める
六条院よりも御酒くだ物 細 源氏より一献をさゝぐる也 河 李部王記云六条院被貢
酒二荷炭二荷火炉一具也 花 延長六年の例をうつされし此時六条院ハ宇多帝の御すみ
かなりけるがゆゑに思し。いまの物がたりにも六条院とつゞけ給ひけるハ抄也 三 六条院と云ること
是以あまた段々不審也。愚案 六条院亡女君に八月つそ六条院は今も昔も猶つゞく
ありてそ此の書くにもうみ見て作れば此院の称号なるべし。されば是る号以あまよいふ
るすとは紅葉の賀や三条院ありしも是もよぶいらへるべし。又源氏君終によき号の事すれバいせ
物語そのかまよ格段をもよなすむとらびありもならべし

御物忌のよし 河 李部王記延
長四年十月御野行幸其日
因物忌不参 孟 源の御
物いみなるべし
くらうどの左衛門のせう
細 此君より源へまいりて也
まかせし 三 延長四年に
野行幸の時蔵人左衛門
門尉源俊春をれ役よ
て雉一枝中に給八さし
やりしせるる例をい以

けふつかうまつるべくおぼしけれど 源氏も供奉
細 某子記 源の故障の由也 ぞすへしるてハ帝作ろひしとこ
さありけれど。御物忌のよしを奏せさせ
給へるなりけり。蔵人の左衛門の尉を御使にて 細 女房の事云 たゞうけたまはりて
きじ一枝をたてまつらせ給ふ。仰ごとには
なにとかやさやうのをりのことまねぶにわづら
はしくなん

てうけり記 河 付る枝の事。柴なる七尺あまり普通の御木よりハ柴せばく。あらくもちて長
さ一枝 裏よ毛のひくうき毛を鳥付にて一統云より八寸ばかりにて上に鳥を付る也。年内ハ立枝を
へつらく雉とたよおげて付。雉をさげて付る。春ハ雉と上でつく。表ハ雉を裏まる
枝に付たる事ハ侍るへし
雪ふかきをしほの山
細 古き跡とハ延喜・野行
幸の事をいへる 三 古き跡
とハ太政大臣の先例ある
ことをのたまへり。今日出仕
あるべき太政大臣の事也
所指場の雉のあとを返
ひ給ふの跡をそれ
太政大臣 河 制度云 細 先例もあれ共
まらうへかしと此御行
を例にせよとの 三 花云御
前まことにさもあるべきとけ
小ハ野行幸にて仁和二
年の昭宣公の例也とぞ
しるしなり。源氏君此時
太政大臣の御事也 師曰 弄花の
例光孝天皇芹川行幸
に昭宣公供奉の例仰御尋ありなり

吟 雪ふかきをしほの山にたつきじの
ふるき跡をもけふはたづねよ。太政大臣の
かゝる野の行幸につかうまつり給へる例 源氏太政大臣にてありしそれ
などやありけん。おとゞ御つかひをかしこまり
もてなさせ給ふ 細 御賀参
源 をしほ山みゆきつもれる松原に
けふばかりなるあとやなからん
と。そのころほひきゝしことのそばそば
おもひいでらるゝはひがことにや 二 野行幸の翌日也
あらん。又の日おとゞ にしのたいに御ふみ 細 源の文
の事也 細 内侍のかうにまゐりたまへるか
きのふうへは見たてまつり給ひきや。かのことハおぼしかなりな

をしほ山 細 大原野行幸ハ今日始まりて万代の始まるべしと 行幸と雪とを
みゆき 師 みゆきつもれると八代々の行幸みゆきを
へたり此歌をとりて巻名とせり
その比ほひ 細 又後志の筆

ひかことにやあらん。又の日おとゞにしのたい
にきのふうへは見たてまつり給ひきや。かのことは
おぼしなびきぬらんやときこえ給へり。しろき
しきしにいとうちとけたるふみこまかにけしきばみ
てもあらぬがをかしきを見給ひて。あいなのことや
とわらひ給ふものから。よくもをしはからせ給ふ
ものかなとおぼす。御かへりに。きのふは
うちきらしあさぐもりせしみゆきには
さやかにそらのひかりやはみし。おぼつかなき
御ことゞもになんとあるを。うへも見給ふ。さゝの
ことをそゝのかし侍りしかど。中宮かくておはす

うちきらし 細 …
みゆきに… 行幸にまいりて…
…

けくによしられても。女御かくて又さふらひ給へ
どなど。おもひみだるめりしすぢなり。わかき人
のさもなれつかうまつらんにはゞかるおもひなから
んは上をほのみたてまつりてえかけはなれて思ふ
はあらじとのたまへば。あなうたて。めでたくとも
心もて宮づかへおもひたゝんこそ。いとさしすぎたる
心ならめとてわらひ給ふ。いで
でそこにしもぞめできこえ給はんなど
まひて又御かへし

そしてうぐえてみ是等の
おつし
わうびさけ　a天子をはまれ
をうろし国をとうらんくまり
神さぐらんし西天の京わう
ねりていんで見りよいつれ
のぬすうてしのさらべき
若宮　三わうびさん史と
りひぐく覧をりうせし作例
我て給一日膝の御服の赤色
自給すね御無あうまゐま
や
まさげく　細　私勤世是よ
ころくとき方三而より
ま〻何せも新んのうらり
くころくしてと云気
みようのうおくしく
若すまけくられいまど
とうろん氣どろさ御
わうやひとは是い給く
そうん氣師紙とぞろく
とハりどゝろうんしもく
発　め氏

原　師わうびさ六日出あうえて東のわくるうとけふし
わくびさせとひうり御つよくりぐぬせとせくて
まみさよめとそくし難ん　細　方をさゆりしまし也あと
しもぞすめませるてそくらくでとしたれりぎ
三　源氏の心
のくころとととゆかりてそのれりまうけ乃
まつ　益　君のきく
御でらしどのら〻内うらうのしころをくく会せ
すふ申よられのうし説をれうとうう御はいとと
益こは代
を世りはさねぐしとそざもよきのづらしくさま
あきにらふ〻
ろくいあしくなりをとをおしてらちのあきまして
あもやうくこともつとらくりやとおくもやくして
まうりてあしとゆかりしまれいばしめてしよう
益　翌年の事
ま〻の洞家の孝て
あをときますてろんとしうかうて二月
三　名残し
女いうそしてしろくとあくしゆきいく

女いゆのしうるし　細　人の嫁あしうえて旅しもあくてそしりハうえて無かくし御氏神らそ
ともみわうてわうし　箋　付後ハ只浪やしんのやしてて氏神をあがあふもとりえ
よくねいハ源氏の御子のあうそあらされてわくしつれしまり此内伝のうち社
もわくだ若氏を源氏とゆるうんハ三笠山の神さ色もえりりがくさしうハ給よ
ハへの知つううるれバ計略あしく送きえうやうまの世のりぶきもあかうとこ
氏のゆかりしうり　祢　かえま
けへよ御まうあつまうし
細内侍のうとみとよ御給
もくぞ喜国又給神の御ん
もいうしさし源のみうみく
ハ源内大臣の子あきしハ給
氏らうえつきらし
つまさしゆあしき後の名まで
細家史さいはてせなくでえ
原の秋わうやしつも後の
ゆのハわうんとし
いまやうくてくらあった

とく人の御むともとそとこりおいそろ何しとは
あうしもぞしと氏神の御川とあゐとおう
ハあしぬ給あれいそも月くまうれむく
がしまへ此り給わりしうしろもわへよハ喜
日の神乃御ぞそうみくとゆきつるゆ信
うくれいくやむおしき抱りしうおうきくろすく又
ざそとり家しさ後の名まうくううわるべし
三　直人まりんうり
あもとくまつきへのきいてそいまめししてそえ
長谷
しらわうしむりつこのきうやすることあ

むかしの師なきゆへに此人〈のきやうそくをもて〉あそびもあれど〻変
源の子とりひて〻奉仕しられへて又実ハ内府の子なりといへんハさうらふ〻三直人
さうらふ〻殺されし人〻こと氏姓をおくらふて比の〻〻
ごくろさ後嫡行の不足のあれいとそもかるへし
まひゆづさもといふよりけてあるへし〻細〻人
愚案　三細同義師説ハこと〻仍来説を〻ると

まもがくらし〻もゆかこの比装本へ
さやうう〻しゆもしくハ我がらうゆかしてと。
をしまいてきんるどゆかしさめてこの
れらしゆひよハうの地とどもあんいれそこ実
えすれひられいたこやこぞの名つくしるや
こ路しとさらはとそらし
あいをて剃んるくへう〻
ねのたもより〻ひろ二条まさひと
らるのさ〻なくりのしあて〻〻

細　男女両様也

内大臣へ〈とらるゝ〉三服
の加冠のごとし　三おらぐ
の御当家の勝ゆひよ又
ゆるしと信しけりさるゝ
此物語の中にも此姫君ハ内
狭衣中文今おもしろハ内
大臣なるらし男女両やうに

ためもらせうとせうらいけりて
あらつきと　私三条本
くせあらでおりてのうへ
祖母の服をきひきかざる
まし　細　玉鬘の祖母は
まざくし三　五ケ月の服也
ちゝそれとて地しる
ゆへ　抄　此実父をあらわし
まゆきてハちゝゝの服も
あらはしさるなと源乃
みかれとしてれとあハ
もまへさへのあられる
ありけり

細　源の心也
いろとましくゆかしと世をいとさてあるし
大臣也
とやもうせさを給ひてけるへらく
どのりまそ地しきはつくとうしお
内大臣の也
かくし〻おかるする世よこのよしおりうへん
細　源三条の文よおりて
とのかりとりて三条の文よりしてきん
細　源の心はありて〻
らうもうり給今ハおして丑ひやうよあるま
ひのんとこゆきさまはとそとてこゝ
乃粧　しどけなく候式が
あしきく
けよく光との〻をんと給れりかく〻
抄　源の心也
まうらぬらし〻そのうくしうとなり給
細　面白き也
みはいらしけりらのかやおしてとより
持らうくらしてゆきわまうかれけうそ
くようらてよりけうれど物まさいと

夕しうハゆうしきうてつまけ
子とを 三 けハ桂ニ濁ル清
正平の御、源の子にて所り
しかも別義おりま
さぶらし安語しまべきを

もひるてくらだんまうる
へらし又独ゆって
三 河海図明載沢全折
腰の歎の故事をひく。
以後の込つまりみつでも以何の
ム八田暗じくもの未武人
大公望をろ先てしぢりやせ
も世すつへるうれと背
わしらしき 細 とうりのを

しうのら給ふ。かしうハおりしゆうきてつとあるを。
むすびしの網君のこころましりして中ぐちろ
中ぐうしうらげさ先え立ゆすめれハいかやうに
りのきを給よりし[illegible]
つ。肉[illegible]
どゆかやけよつろへとを[illegible]
何れバよろ[illegible]
それ[illegible]
さへぬまそでまりおりくるし[illegible]
給めれどもやしくゆれくきさ[illegible]
そふりのさまよるへ何[illegible]
年のうりのるや[illegible]

さハ[illegible]
名庭の[illegible]
今一[illegible]
源よ[illegible]
くてや元気しまうへ[illegible]
とんか[illegible]

へさ人てふて 五 妻上
年のすし 三 妻上程
相か

二の中将の 大夕君のある
ぐらる達磨あるらぐしに
[illegible]

まかりめりと[illegible]
くれをさや[illegible]今一[illegible]
[illegible]
[illegible]
のびおり[illegible]
さ明[illegible]
とされ世のすゑよ[illegible]
のよりて[illegible]
[illegible]
よこの中将の[illegible]
ひわりひう[illegible]
かんぎ[illegible]

おやけのしゝげく
戦関白)三當織のが
恭心のわさき気し
の縫ゝとゝへらんる
一ゝゝくの作せらよ
ゝ倫ゝんとし

びさゆと。あゞあらさうにみするそてかくせんのもうす
ともおこがましなれどさうゝともなれどいゝ　細 源の心て理ゝゝ
われせけれりのがくうりどもむりしいまのものかめ
つゝあるゝし縫ゝつぞてよ。らゝの中てゞ八日へぐれて　細 源の相申しにあり
どまつり縫ゝしてゞげゝらんど。ゝうつゝてよ　西門大臣ゝ次ゝにゝゝ
錦屋のあくさゞいりまゝらくゝまんけつゞて　ゝゝ
えたゝとんと出ゝしゝの師ちとさゝゝつゝぞ
さくてへらひめんもまうこぞれハゝゞつゝさく
てゐんとるゝて縫。井がやけゝしのゝげきに　細 大夫の白村傳ゝ
やうゝさらしのそゝろざしのかゝらねゝやさ
しそふゝしひ物し師ゝぞ。の縫ゝぞへら　細 本井屋のゝゝ
えんとはかゝる人のゝしとよう入中ねのゝし　三 ゝのま結へし

けゝらくりてうそよつけて
立そわし君の　いまゝりつ
ねやこゝよ白府ゝへぞゝう
るゝとて一旦の名をゝゝ
くゞゝらふもわゝぬかゝと
后樹ゝの立ゝし我ゝ立
よゝゝゝゝゝもちゝし
わゝめや
ゝそゝら不肖ゝりいとこゝけ
がさん人の寺上　細 内大臣の
そ名の程との立りゝ太夫の
内心よハ氏ゝしもゝゝ世人と
源のゝ縫ハ氏寺井屋ゞ
根ゝりゝかゝてくのまゝ
りゝゝひるゝきよゆるゝして
名ゝせぬ居の中のゝゝゝ
ゆきるゝくけのゝすゝぞそ
まよゆゝしてゝゝゝ内府
の不足よゆゞゝともむす
め二人捨ゝゝゝひてゆる
しゝゝゝゝゝと源も口
入ゝゝゝゝ源の又
のゝハ氏服ゝ。かて立出
せり。氏物語の中ハゝゝゝハ

めしけよせゝれらゝとも師ゝをゞめれしと
はらゝゝひど。今ハけよくりてるゝよつけて。　細 今ハ中にゝての一節
立そわし君のとゝゝ人さうゝしりのゆもあく
ど。おこがましくやぐよぶりて世の人もい
ひわらをわらとるゝしものゝ師れどゝそ
ゝらそゝへわかゝしまゝ。いとさけぐゝさん人の　三 一成ゝひろゝゝ
かん上しそふえとゝんゝてゝゝゝこの中ね　捨ゝるゝゝり
ゆれゝゝゝかりてのゝへぞらゝとゝゆ　源の心ゝ
て。いふゝひゝきよゆゝしてもそ縫ゝしとゝりや　細 源の白
とゝゝ師りて。らくよさん人へあゝんゝゝゝやら　源氏ゝゝ帰られし
ありしゝど。いゝとゝひしゝくいゝゝ縫ゝゝし　内大臣の出ひの中よ割しゝふ
どゝ師し嬉るゝかてさゝすぞこしとゝも中ゝ縫　源の口入を縫悔とし

おやけのもしげなく
花鳥 三 當職の
花心のあるき気色
の給へる御へ人
一 ...の作せ...よ
へ侍らんとも

けはつりて見るを見つけて
立ちかへり君の いまめかし
めでたき御前はさそ
思ひとて二旦の君をもて
くたちもわろからぬと
御前の立ちし我は立
まかせおぼしもらし
わらめや
もそうなる不首尾りとも
かゝる人の事上 細 内大臣の
それの様とのまりなまの
御んまへは君かしまりせへと
源のゝ給いは雲井雁は
非道しいかにてくのまゝ
はかりひとなきにゆるし
名前を大宮の中のすゝ
ゆかしさたけのすゝめれそ
ましゆかしてらしきか御前
の本意にもかなひともし
ひと人待ちらるなひてゆる
しかなりけりやと源も口
入せられしかと源の又
のすゝいへ此服色の御心の事

びきゐと。あはれなるよなかさそて。かゝる事のうち 細 源のさし理なることを
ともおこがましくれどさうなくぞとすれど。
わられせれまのくらりどもむつしいまのよりわ 細 源の御用心にあらずなくし
つめるそく給けりぞよ。らうの心し八日へぞて 内大臣は次のに移
どもうり給ひしなげくらんとうらつらぞよ 桐壺殿にて
雲居のかくんぞいまうれくらんいぞてこそ 西京にもとし
えちもとんとせしとの給ひとさらへきつぞ のたまふこと
かくてへさいめんもまうくこなれは思ふかつらむ
てうんとさらて給。雲井がやけしとのしげさに 細 大宮の御付侍也
やどさうのくろさしのうらねりやさ
しとあつしひ給ひし給ふことの給ひとも 細 雲井雁のこと
えんとはるすゝ御のくしとより六中ねのと 三 さの宮(?)注へし

めげなきそれをくしても侍るをえてめれいと
はかなくのど。今はけにくくりてゐるをよつけて。 細 今の少女にてたとへ
立ちあふしきのそらうへさうてしのみもあ
とおとうきさやうよふくうてゝ世の人まい
ひりくまてまかとるうしものし侍れども
とうそとんぞいかしまゐり。いとえげかくる人の 三 一度はひとへにうらみし給ふ
かん上もそ。んえもとうゝんまうつきこの中ね 任ともことうり
うれしくみかりての給へで。しらぬとしひの 源の心(?)く
て。いとおほひうさきにゆかしてもそ給ふしとりや 細 源の詞
とさく侍りて。らくよさんへおすんひまゝけやう 源氏より帰られしと
ありしかど。いとさましきしくいて給ふへ給ひの 内大臣の思ひのまゝに割しまさし
よそ給へ嬉しるまてさまてくしきもさとる 源の口入を後悔とし

まろけのすまこそよかし
三 内府と吮りすつ須乙
一切のあやしうのわれく公立
ゆうさかしのわれもきら返しす
もちくみかいくもしぞわら
人とものゆるはそくがれ
抱とますうしてのあそ
つくはあしさみちうのまよ
三 一といひ給はれうちの名を
吹きなけうら礼にかりまね
とうらへいかみたもも座ぎよ
りしぬるそぞくし
思ら御くりうあこそ
まの世ハ百年のむつしきり
零落うるら留らずれさ
とひ他の舞をよらうかふ
ともきうてうちの夕雲に
すうちやるのすもわれし
とらずう
のとおしくそてのする
三 式ゆゝ卿しさハ陳態よ
師由よるめ笑ひとゐふゐ
かし

けんと・ゐあやしうすいたまはさめると（孟 梅思ひ々やしく云ひてあれは卆）
のこと・まつけて・ゐゝめくらくし（孟 花ニ洗濯の心こよく）
ぐいさも・とろうそしらて
さまへるおぼしく・さうらかし（孟 渇悪世）
よまもらとらくもはべるなる
ざさんい世すれなきまうとつけて
よるすれば・ゆらゆく御心ぞ給へ
れいのしくるてまうあるし（細 因果）
みおりきつきん・とるん（の命終ふ人と名付之 孟 宿曜のすを注記）
て・ふいまろをとりて給はな（不意）（細 …）
さうひきさまとあり給（みなもとのうぢとなし）（孟 …）
ばあれからまてしのこくえどろく

ぐくしみくも 三 さとつけ
てし・幸のすとらひてき
思案ふとひ内府のまこ
とも稚子のもくらうきり
きこつけて聖ひしとそ
何のうろきとがかいとそむ
人をとうしとし
の所れまつくし
延喜式云内侍司一百頭人
尚侍二人典侍二人掌侍四
人女孺一百人也
こらうのすけ　細 二人あり
すけの補任あるべき歟
競望のゆくもまとと
晴古老の内侍のすけさ
らぬ人も内侍のうちを
ゆるしく　典侍任尚侍
例弘仁典侍浦虫天安二

ともゆるされて・しづかなるかくさきの
まあらしとそ・まのいはうえひろく（細 ゆふのこくなきまえに）
しくゆさくもひへもを給ひくしてと（細 逆ハおなじからぬなりし）
し月給つるを・いつでりとらうらかに（孟 主のす歟間より尚侍）
まゆかをしるてやう・あんあろ内侍す
ちやつく・すらんあいてはの家のす（細 内侍の役人のうち）
とぐとける・女官などもおかりげ
とつくまつるよし・うつろきこえて
やゝよろんあるかとさいまよか（禁中之）
らふこゝのすけ二人みさうつきさ（故老典侍）（三 族姓卑下ナル者ニ擢ニ入ヘキヘ…）
ざ俺よりまうさばかりくしうは
まなびんうるとまるあふひまる

従三位廣井女王應和二
藤原灌任尚侍之例こ
畧記之

歌よむ人のわかれりるなせ 細ならべき人を撰出べき とし。又私の家よ君なじ[illegible]の例もわかる是 歌のはなしそてしらね 細私の家のうちょせ[illegible] 人と云ふ说ハわれど此義 [illegible]し霙歌ハよろしくてさ なりし秘歌のいとなすを とふよこそしなづる人 の方とあらぬ人ハ内侍 のさよハ但しなるき しゃ歌よろしくてなめづ へのすとふよいれん人 と云ふ定らるとそ 孟本歌のいとなすをしそ なりん内裏よハ事任 何依ざし 師なき 歌の人とよ[illegible]ハさうれ 歌風とてそらんと。 [illegible]

と歌よむ人のわかくなりしぞ。歌の
いとなまそしぬ人なんハおしへなり 孟本うた人 細異本
なりゆくはけるこしよりしこ[illegible]さの
えらひそえん。その人ニなしてと。年月 孟 むかし古き歌よかくれども
のらうよわりのかうまぐひわれども 孟是人
さひべきよりしくばえうき説第 体よりなきすれバ源のひとなりとも 孟なまこの方こ
じよえらを撰がんとおすんがらくよ此秘
をとれなりしとよげるさとしもろ 細此作ハ敵なる二似合まる也
よりは也延らんなどへ人もさうてすらよ ハ辞し常之
てらとドもしひとびハ此ハりてそくご 主を
なきこしるれ此わやけざ哉しそさうさし 孟内侍宗のうち
ろのしとつうさしりまつりことのとも

もてうよりしなき 細すけ二人ハ年月の労ありれど其さ人なくて撰るべきを
の定めなし 三 賢なきとせらるべきるすてそ古老のをさけ将任なりてもるすくら
へ多れともし
家任いよろしくべき 細 地して家任よ出るすハ秘蜜ともゆべきのふりまえあるべく
しょうれバ内侍の敬をあるりめんの心あれバ人のむともあるは参りせんハかなそ
なすきこ女御更衣とそ望もしつきるれども又此すと嫗ひなら(?)べきるを
ままそハおすきさし ひきぞそあるしあるらめちらんとハそうなくぞ志らう
どおそれつけさやうよ此れてられどぞふ
みさしをわかんてぞ秘労のありさ侮りく
こそよう例のことはめれども也わまき侍しつ
いでよるすんよもちひのかどるどもらひや侍れ 於内大臣の家かなるべきなるとへ
べよの御よろしめへいとしよるすんありもをあるを 御よしなるなる事ありかや同明ゆきさとし
いうちゆるべいてとぞともわりなうつ給へ中将 内大臣よこ
う侍るつりくるすくてハ對面侍へざるなふ
侍しもぞやうくわうこころんとおもう

か 報労のありさ侮らし 於らざん人の身のにそゝやく うくしそ何なすも苦辛 ハあれさき[illegible]せそ見んと 源のならひなりのうへ子[illegible] 氏
よろひの籍なりと 細 内大臣の御子まそて御[illegible]之源の氏 ま[illegible]てハ難なうんひなう こと 師あるかうしのまそ いてありし中とく

せうそこ申しを
おもは勝ゆひまいらの事ぐ
さるん消息かくしまひ
られば、かわりし後のうさ
ぬのやうまでとつまて
細大夫は…しゝ勝
続のろうを故障わりし
るみし盃大夫の病気よ
るすらせらくとし
続くらせひいとさせつゝい
でよらん　三　せひ文あり
御ふと所しせひ盃
まうりし…まよ肉布店
よ対面まて候るよ
あくし

よぐさやうとせひめらしてぞそこ申
うち続けるやうまことつけて抱きうけすま
ひまうし。げまおりちをびんすうせひと
まり給よ。しきちうりのをきらせ給ひぬれば
あるよとうせひとさしおうつらくみもとらんせ
小まかうさやうまつうへりのをさせまへとやあし
給。文ゐりうめく給ろうてとまけかしこまりぬ
うち海くまうろあれりすうへとどゆふてまる
くひうひあ川めてしまいがうすゝくぞう
のまたしう源を釈とやうされしとこ
くひきうらづへからくさこしうちてんこのと
しつらしけ給ひうてかりわりまやとあめし
まへいさらやう給ひしるすりぐくらし泥さ海いり

三

あつせよ大夫のくるよくお
てぬらうやし源の中将
の方まそし御給ひるやさ
らくきさえんへのうさ
らひ　お文幸の幸平人
おどこそくやうのますて
おれとわへまへ源の乃
まねこ

らちの地いよのみも
盃肉布店みも大夫へ源
ようりまへとくさるてさ
も源へ大路布店し

せん子どもりてうやし
お源の前駆也盃肉脇
あどく川うとすへ会わ
まどうゆとく

のゆくをとのつしくるゆ大夫のひてんぐさ
くちさくすな人のうつしひかくうらことをま
御れはおうさんよつけても。らくうつらくへい
ひつて人給んを中将の御隣みすてよおうざつさ
まへちつと給ひしもぞ人いことりしきさを給ま
じとはらちりさこめゆめし給。らちの地やよの
みもく三条の大夫よゆかりさ縁ぐつりお
しまりうりし中のまて。いうよさびげよ
ていつくしされさ海をとまうらけ時めし給ら
んごとんるまどくしてらやし。おまうしひき
つくるふ人もたうそくちつあめくつうし中将
いはとをまくしそ絶をられつつめるまど。ゆく

又家のれ文あり　細 大臣よ
り源のよふくひのよ
しあるとく侍るし
ことくきふうきこともろ
や　よはおしで
孟 事しらてこゝろさより
わをうまほとゝいふそて
わもおもけと
ひめんまちえて
御 源の御むしてよた
きゝもおろやうよの
きよしこ

ろさあそて（御内府の子息さうく）これこしのまなむすめ。むつましうさう
（孫諸臣之御内府の家礼の敬上人ともある（へし））へきまうち君ちうてそまつれ給。御内府の
（作法のよふ事也）りのれいききみだりめくくまつくとよ。
（孟 内大臣也）うつくしとまいろべきとうりてりのさは
じきやうしんあどのくさまの給よ大臣
のけふそあり。志家の御（細 大臣の父の詞）しのよう（に）ひりわ
うりきつるをのさひしげよ侍れは人めい
（又は源へ尋問す人もあること）と御うちもいくらげあらうそあるさとく
しらかくゆのしろやうみはあてそらう
まひうんや。あいめんまさてまろり
とちあるうと。さてしうまへつき。ろまでに
（雲居雁と夕霧の心ざし／細 内大臣の心に）くれおしんどのひめ君乃御けしき中将のかへ

まやしゆかりしまのすよ。ここやとゝりは世お（かたおく）
つきもくるげよてこのくとゝとら
（源の一言を人をうつくしく）ゆうじをみくうしぬさ御よひとしうら
いそうしと給さんよとうくやへさう（つまらぬやうのかへさうらんと思ふ）
もえわしりしつれるくてきられぬをそ
あよいやとうしきで。さるべきつゝあらいは
（異人の御言也）人のけしとよるひさかれそゆるしてんと
ゆかりそ。れところをさしあてんをその給けん（句）
ことさひよりすよ。いとしいろひ而そら
らんかまさるとしうさしをあらんとや（よそにてはまさるまじくへきこそとの心也）
（抄 夢子迦也）ろうし。いとけしうはあらぬ御おやらろ
（孟 内大臣の心也／大宮）かやりしきれどしやうくのさまは。世のおほえも（源氏）

あれなくて思ひ　細 夕霧乃
ありうらてもおもひより給
くぎうとそり

御心をさし合せて　孟 大臣
と源よりて御心を合を
て源のくみを作せられ
んと内大臣の心也
みるへうさしも　細 夕まき
さめくひあてくされ内大
臣の御心くせ也 抄 夕霧
まいるよひ而わしじとい
ふ物くしきりとそ 夕霧
へ対してはあらあり給

よいくせんとおもひやりて
らうくもふそこらみ
つまきんとよ内府の性
と也

ちかくとし
細 宿徳（シユクトク） 宿植徳也
これの世よらんちかは
今の世には光華あるを云
は高徳と徳のかけたるを
えび染の御さしぬき
花 直衣布袴之様の下がさね
又ハ直衣にしらかさひ

對面もすべく待おはするにやかた／＼にかた
じけなし。まゐりてこそはみけしき
にしたがはめなど覚しなりて御さうぞく心こ
とにひきつくろひてごぜんなどもこと／＼
しきさまにはあらでわたり給ふ。君達いと 孟 内府の子息達之
あまたひきつれていり給ふさまもの／＼
しくたのもしげなり。たけだちそゞろかに 細 今うと 孟 内府のせいたかき也
ものし給へるにふとさもあひていと
しうとくにおもゝちあゆまひおとゞ 細 宿徳 お 歎もらく
といはんにたらひ給へり。えびぞめの 細 歩之躰 歩様也
御さしぬきさくらのしたがさねいとなが 細 直衣布袴とある出立也
うすそひきてゆる／＼とことさらびたる お 下かさねの尻之裾のこと
御もてなしあなきら／＼

きらしと見え給へるに六條殿はさくら お 源氏也
のからのきの御なほしいまやういろの御ぞ 孟 紅
ひきかさねてしどけなきおほ君すがた
いよ／＼たとへんものなし。光こそまさり 孟 源のすこし
給へれかうしたゝかにひきつくろひ給へる お 是内府の衣装行儀の勢ひつれなる行装の體
御ありさまになずらへても見え給はざり
けり。君達つぎ／＼にいとものきよげ 孟 内大臣の子達之
なる御なからひにてつどひ給へり。藤大 細 内大臣の弟之 お 紅梅の事也
納言春宮大夫など今はきこゆる子ども 子共也
みななりいでつゝものし給ふ。おのづから
わざともなきにおぼえたかくやんごとなき
殿上人蔵人頭五位の蔵人近衛の中少將弁官

さくらのからのきのなほしを
しいまやう色の御ぞひきかさ
ねて 花 是ハ布袴と
いふべきを今やう色の御
そハつゝみの衣也。下襲也
いかにしても袍ハ着する
いかにもなうしてはなり
らう氣てからも引つゝ
ろ 細 此時ハ宰相に至るを
いふと云ふまでに源氏容
とふてもみえ給はざるべ
義にまさる氣あるべし又義
ハ光こそ徳まさりたるへと
云是源のすがたの事を
内大臣しかふ しき也
内大臣ハまさりたるなき
とく二藍なとよ用
お 光こそまさりたまへと
源氏のうちへつけてかく
さうかと云ふより内府
のまさるゝ義と心得可然

ひとゞし花やかなるわたりへしきに十余人つどひ　孟十人あまりとよむへし　細同
さまあれど、いかめしうつくしうのつゞ人も世侍
そでうけしきあまたにひるかれにいれ給ひ
よそうつてなどくらうさへあゝへよはなくれわ　細人々のなをちかき業人
つるれ蔵人どりの渡にまうり、おもしいめて　源氏
らしきれ対面よむりしのことを少しいそくる
れてよそくうそそくろふきとすまつ　孟雲井雁のことなどよつけて
けしくいとおしきれんをそふへつあれさし
いそへきてしまてへうこゝろまのとき教たるこ　孟まことも世あるき時のことをおもふさ
いかがきゝしいはひし出つて生いのつゞそてなく
菅いまのつゝとかとをとくろの汝稿給り旧
菅わけれかりしけるなしとゝめまうりし

ほうらしやまとうかれし
細蓄幸と勤南之孟今日
まうしもとハ郁庭と可思
とまうて
うんざうハ　弄源氏云
弁のあとにかりうせてその
あまく喚同義孟こゝろさ
まてそうんざうハうう
わうべきうかりとえて
よはきょうのしふうやうさそ
河比翼　四皓ヵ故るり
とひく孟比翼ハのやう
よ源と肉府のおつぎハ
わりしとく臣若哉
ゝ羽翼　史記
そのうまとをのへしかいるきこ
おほ源と内府とのうちむし

まうつそでハおもしうりめへうりれうとめつるき　細内大臣の源へ
このうゝりてうけ給つりすごしてまよしうれ
此うくしやそそ物しとやう給よりんゝざうそ　細源の御こと
こうまさこ海まう人かゝしもむかへしゆかり給　白孟表紙よりかゝと古り　十二才
るみてよそへきてそ給まとのこしゝやゝしお　内大臣の心　細葵上の事のこゝや
とせひかて、ありさとなうつうりてりしこまりくろい海
まれ思し給むりしうちめやけよること　細源氏の御　孟文和よつけて内大臣とかやか合宴
のにまさへのこしよつけてこゝろのへかそてなくこふ
のこしなくしうけ給うりにをおまふいや
うかくせかをけのれうしろうとそもつうう
まつ人をみ人出ふすへしとぞまのうしめて
そのそ世やすまへし御いへなきこやうなきこ

のやうにおもくなるべきの
あくり
らうくの日さくらしてた
こともハ　孟 内への述懐ハ
まことうたかたのかぶしん
別のひとへらいかなるり。
おほ秋好中宮と源の入
内させられて弘徽殿の
竈をとりあつかのくしく
又源ハ言外にかのまを
あるへし

いとうちつけ給へれど、いとかくのみさく
ししなにこそへ此ことのこゝろざしもゝ、
そこはかとなくすゝむかなましくこゝに
むすてつかり給ふ年ごろひきかへていみじ
へのつらさん思ひしりけるを、斎宮給へりこ 細右大将の殿御文なり
ともいとあはれなる御思ひ[illegible]、[illegible]
孟 それハ[illegible] 思ひしりたまへるひと
[illegible]
[illegible]
とかくしおぼすことハきこえけるひの
給ひかへるん[illegible]おぼしたり、く給へし
細 内大臣の御せ 河 馴思ふ面馴
きこしめしへいかにいえげにおぼれてお
細 ありける後息内へ返事
やみくるべきまにてまれさらにひかへ

これをきゝかへさりくをよ
細 源にもつてやまてし
がくも許りもなる早くに
しての給へ仰 源の人
わをまうかきさうにそ
とのさかひしよころへ
細く十年よりゆゑをとりへ
より始めるとよびたまう
でられしききしおり
さひろへかうな 細 源の
御思をおもひくすいるき
とも奥白みてゆりの給
つくろく
ちひのつもりにはげるを
のがらうかばかふ
孟 年よりあれど御息
のこゝにて無常アること
くおいさきとひもしりたく
めそてもとらひかれ
めし源の乃まいきまいて
御息を御してのます

よはひなくこもりくうしんぜられしと、御かた
やけよつらうとまりしさはくそれをとる
らずさるとそよいれしきれぞつたまへそ。
孟 源の御息にそれ此屏をもそろへく
ちかぐしうくぬ男めでくる給ふうさ
よひ給そ此やけりつかまつり給ひしに
そへてもさるあるぬよい給ふめさいとん
ひのつもりにはげにとのつとらゆかふこと
お 御息の人て
のこるん此かく給けるどりことまいか
細 おなじのなかとかひかにて
給、そのつらさる御のかり出ちひよなり。
細 内大臣の
此いひと哀よ見づくりまつりこかも給
かうられとけらうまきめて、そのこよ
細 内大臣の内
おそこのこゝさ
まつるよかりんとぞるとさひきかへし

らぐくにつけてさまざまひ
侍るをこゝろすしくところ
しくさ侍るよつけても
内府の子共事くにゆらさ
おもふハ天が下しくえろ
よつけてもとく
又こゝさ海よそくみそくよ
つねそしハ義す也ひ見る
ある　内府の子ところ
こゝを我子とそしあるさ
為こりつるみて見ればゝ
又義よ也ゆうしにつけて
もおゆつるのす八也ひ玉
らんとし

さ海ハ今まのつゞくまゝ侍りんとれへりまゐ
つぎりしきこしめさせしらしるへし侍（細 りしくろうかしとく　孟 面義也伝の竹のるとし）
あいまうすこしへりどもよりもあり侍りよつけ（細 才の意趣出きひさうらうとく）
てならひくしくしうね抱どもののさぐりよつ
けしくさ海さしひ侍りどもくすくさゞり
とゝ侍りよつけても又こうさ海よろそく（こうひとりけるとく）
まつまねてえおわされ又もひきまへらる、
おりよそへてこともびかん也り出しなりしと（細 おろうつのうをこひ出かすとく）
の絵つゞくよのつかしへのおま秋の抱ざさ（孟 帝木の意也とく）
つまよ宮めて奈りしれいつゞしのさことめかと
ゆかしくさ方ゝさくりしへくみかしら
じくれのひね秋いくうりめけてどめくれ（源も内府も大）

ありし代まさりけるま海
孟 内大臣も源もつさ
どひおくに栄を思へて
又さらべきめぐし

一すゝうへ奈すしに
師 雲井房のうすと源氏
うり給られしまとけぎ
つましゆるかや

絵ぞくまりさあひてこのよめ久しくな（紗絵より源の御と）
まめる世のおろうしやまへ出られてかハ
しきこの也の心のさこよ立出ひんらを
し侍りもそそ地さくらうらそく地え（地）
しかさぬ公条敵もおひおまさうやぢら
さ御されね宮らさまいて姫君の御て氏（細 義父の上の御世よりとだ）
宮しあつよありしよ生きうの所の様いつきお
ひとゝなりぬよおのそてゐりしくゝくめ
ぐうてさかくしるきさのよおまでなる位（孟 太政大臣に成てから出世）
げよらんしみすりそうのつゝくへるれざ（へくみて）
中ねの御かへし給へら出給つゞきありねひと（細 雲井房のうすと）
おもういなしと思しとさてかれハくら

盃内侍
もあやまりてさ
くいは源からも親はまた
あそしも違ふハ應のあや
と同心のあかべきまとく
まかひまんらくして
安芳ゝ一分絵出て
さすがにむごもがれなら
御覧後のかみかんとけて
これしまはひとつを
訪しまするまでらまうえ

あまうじんやもしく白
おまは法勝由ひつきあの
むかしをちえん法せらるそ
はやくまかとあらしを日
のぞく内府大臣の源氏
きそえ来り あかまらしき
りしあれハ今大臣の法
聖女をよめらしりればこ
こともてしく

いれんことも人まらく出かりしくめりのむと
どうさんの法名しさなりさま。さしもが　ここさらハきう ものを
しらずしえ
ぎらそうすゞよむきもがれさうらし給
うり。今和もはらとはきふく母へらむさら　細内大臣の細
つけまさはらしくりやそてあれ。けふ代し　盃内府の源へ別
これりハてしさしまうんまつらく　布法もよまかんらく
やうへハ。さしくこのおらやとももうろしう　盃源の内大臣の法名のさと
みえ給ゑうるのくれ。せのえし日。さらへさゑ給　おめらう豊前守のさと
つもらうりまつへさきよしせのちぎうり給
小法親女ども、あうて。きのくいさくまうふ　御源と内大臣とく
ひゞさいともめし。さまうらの法ととの
んくそ。うのよごしまつりおんがらし　佐野の人それ共なるらく

又いるする法ゆづり
細　花鳥彼めら寛白を
も源の中ゆりまひしに
又仏まりとこと世るま
あそもらく

きこめくんさらう
畔おいづくとも源氏の女
じまハもきき給うしと
内大臣の名ひかめく
おんとしあらさゝさく
細　紫上法ぞのつらうめし
まんハ人国とつりくと出家
もとくみさりとそて御ふ
よかしら給つゞしとそまぬ
りしまめく
されをうみすして　細　源の
きしあるまハあるあぢ地

されさのんはいらしげ。さしきしげなりらう
そ。又いかるおゆゆりまへくさまるみるでひ
からろえ伐しつ。りらすらとへそひまう　おなごしめるすもさきだちしきりにさき
さりるり。出とうぐしらつけま。いとゞうしうごいひあまえ　細　御数寄をいとゆりしく
わとあり覚てあへぞ。小ろしうらけしらり　源のつく給ありそそもらく紀
めんもめまぞ　源の若きくさとて
ゆやうし人もひんなのしんよ。勝え来てうらんえ
じめ代さらつよさゝらそうてあうりうと
くるろう。殿ちらど。やむごとなきこゝくと　盃宗まかのくさと
ちぐらりてらけろりてそのさにはいりく
すらびさ源からまつりつくらう。そのくせのえ　御法にえ人ま上き
れてハ蔵通まゝきらそとえて
とおうくあくし給えへありく世がりとハ口お
しれとされなままずしこそくきことうへ

とさへどそれなどしける
さるまじく

十六日ひがんのはじめにて　河 彼岸斎法成就経曰一切衆生接二八月斎ス十方世界一切衆生離苦ヲ得楽霊瑞所也毎年春中秋昼夜各五十刻を時正といふ仍七日斎ス也

いそぎたちのまて　孟 [illegible]

のうちと給急きまかく

あべきこくめしうても　細 内大臣に

しきさくみかとものはおくうりまつれどくちん

まうくみかくの御もんかやつかさの御よ

をとゞとひきこめてしかれ。女れらしの御かたさん
孟 こゝろえて

こくもおかゝさすしと思かゞさへ。さもしうくも
孟 深くまゝをや

えんと内大臣の御すかをもて

やとりの給へとさらそとかうへさこしかり
細 三条宮へ参らせ源と内

はとよりいよおかしくもらうくのさまふ心

二月ついたちころ。十六日ひがんの
大臣と宮の御ことを

ちしめみく。いとよき日なりけり。ちかう又
細 十六日良辰のよし日なりけり

まさ日なしとかうへ申けるなかに。宮よろしく
御病の宜くて

おもおこたりまれば。いそぎたちたまうて。ひの
細 源の宮参の御返事へ　細 内大臣へ申されしさま

かりのそ中くよりあるへ申あらはし給へる
御消息の御文あらはしきと

しこ給りはあへきことはしもとしへきく

まへ御。たゞうれはやとくこらへなうく
細 内大臣へのくるしうもおぼしめすやうなく

をおりぐさうらんとしぬかをも心もとし

なんられしうさかくて猶もゆふ

おぼし思びくならぬやうのこゝろと。のひ
の御様く　おりうへのうさく

らきそなるおやしのよくもちゃらおに
夕霧のくて

すとさあそすうことしめのつかおみのつける
孟 裳着の事もあり

きんのれまた儀どもりもあるとさもちを出しる
おもろうへの心よりこそ

られてさひかしざりけるこゝろへ
花 [illegible]

ちさこられどさされどあつましうわたりけう
息藤と夕霧の心て

べきほとあうりさうかとおくへてもとこそいと

くうきこえめくしさあまれ。とてその日
細 夕霧の実法の事

よあうりて。三条のこゝやしり思ひやうされつ
細 おかうへの文わうとの　孟 三条の宮の

金比まいらせ思ひ給ふ　細 三条

おかけ故このうし　細 山よう

の字はえぬ 金比なるる
はえて心おうへとも今亦

又いつもれなる八一紙と

嬉しさこよく

以をあらけとこ思ひわい
細 姫分の見れお
やしうやしまとらひ金を

のみこ 既源氏のもうわ

らうよ見めつされなとを夕

霧のいたのまゝへしと類

いかしと今こともよし

と国語いて心あえ

世語く

こののまさみこへ　細 雲ね

居と雲井居よりいま

さりさまなる押ととも

あともあしもで　直の字

へ荒る二八役もわうすと

云こ

されとあるまじうわらけ

うへき　花 雲井居とこ

ひつけあらく又おうへ

らどうさんハわがちけさ
る事とおひとへをハ実法
のつと第子立派く

ぶく、こよ　細　玉琴芳酒
家の丸みすれどもる大家
の内孫又源の内みと又
じる藝上のまうこるれ
ば望もみ孫とちく
御大家の内所くござ玉
てげの深語すそしよる
ゆくに内孫ちらへきには
と我身をるれぬりけ
ましよとまつ
頼もこうさにゆりまして

ひあり、はぐしのそこころどかはくるすれど、こと
　細 父の御し
どもいとらてりらかしまひく、きこしえんま
　細 手弱尾まそもうすうし
をいましくあさきみさ御とぞふハものびこめ
　細 余すりきたかふとし
かれどきうらこまてをるずうきこしめしげうり
　細 君は孫子ちのりし
と覚しゆうとへうやくてあん、められよ承
一をあうらめうすらを、うけうこしえさん
　細 わくハアせともは親父よ随ふへしと
をいくはたりよよあうさひらくちん
　会
わさりさまいひりくゆけハおいしげ我
身をるれぬりけどろりるうといとうめり
　徳と
しうられすきうい去へる我霰もうるすき
よおりまして、でもはらんしきつても
ふ程すれバこそすりつくらでいたる所から

るすとも　孟　源のもの方におりまして入内の
らごハたちれかとりきすれど
のちごれたりとと云ぬ

幸一字の中に　細　斉　徳くち
こと家すてつきめて武お
ぐやうる御縁の個のこ
くろもわしらると、ぞへさ
ることのうさこと云堂
国さてをこしぐら衣さつ
るれすしつましあれバを
此斉のおきこされどそれ
いわうるれバえろうし色
するうやし古人の随しる
る事之　暁世の人へよ歌の
さまくと云ふしらう批判と
いづれも先くにみへーつろ
ありく

　お　此内文とおらんじく源の乃か上羽し背ハ内文りきき
ぐさるれど、いうしやとの内てよ、むりし、ハ上
　細 いさりし
どよりの語りうれ、とりしよそくくおやる
くおいゆく物よてそありうれ、いとうくは
　細 なをくお古ひよハおつもと
身ろうひよ各ろみもてしらむしうちもひて、
らくもら成くしけよすりれまくれ、二十
一字のるりよ、こしみしとすくらくそへこころ
　孟 聴之
こどのくくきおりうし志のひてまらく語中
　荒内藝上の名をどいうや
ぐなよりちろうきれちくくさる、内さうしそく、
　細 御海西藝あら沿五よても下さ
れらしあげのくるじいとまするて例のつが
　お 藝ハ内名上荒五藝里以下の名ごそうる也
どもようしのくるさ物こうらてしよまう内
かくをりまへり、れうらくどれらとんハぐく

まへろくしく 師 衛司まよそへいろすわかりのにいけろぐあらく堅固なるとく
つしのさらきぬ 河 薫物方。自唐傳致也云々。又唐物にて合する也さうまらくいふ也

よはきらぞくへでこのねうよくしおかつさま（作大女房ちくへのんそてこ）
でとりぐくよ志つかくまへろる裸、どとりまさ
らもぞさぬぐへはつけらくさどろりのはこうろ
くせどもりよいじらう河くしまつれいなかりしう
こゆうと東の院の人ぐもうらうれいのそこらは（二条院の東院之）（受領なと）
さく給なれどもしうくひゆのしまへてきてす
すらねいさてきくしもくしてろよ右大臣家のの（ひそかのこそや）
れくこおやしうりのうりしうさうくさ、とし（おまつむる之）
のあわりすくさぬごらこいのはこうろくでいさく
りこのはいそぎことしその事とくはらくしもらく
さんとゆかしくりくさのじしるまんしいぐ 給ぬ（河如玆之）

なくとつくしまれい
盍 前にちひとのぐへ
河 音絵ハ、そふやうき
ゝゝ 心ゝ

表かうけくらし おまま
地ごぶしるてうる昔月の
るゝと昭陽しくらろ
わとうんいのかりなり
毘 服衣まして周事
盍 例ひハ人色ハ凶服く
おまつりハ服ありそ
も有らるあれともや
くの従者の附ハ似合ぬ
地みかり 蒔繪なと
乳らきい紅のらかを入る
わとしま深うきとい心や
むりのへのめでたくしる
細 肯ハ執しるもの
師 其法そまうまてう
しるへ也
志らくきうとゆう 細 志らく
とくろそとしるなと河類
の本くそとさけを云らき
うえたちくもと云うれも
あり 師 衆の名にてろ
こうくえおかくま泥ハ六
んよわられのみと

衣なりはうるはしかりしおかりしいのかた
るまりひとりとよ又めららぐりとしろや
むりしの人のめでくきとりけりおもとの
あやまふ
海一ぐもこくれの志しくきゝこもおもる（細 多重なるさ）（叱）
れらのはこうらきとようは衣をとよいれて
つるいととうちらしうてまれまつうれ（衣なとて又衣をもつ）
かはおしくをあつきろずかもは給くれいつ（おまつむうりの文の詞と）
あうれどもうからくしゆりひやをまつへのひ
かくしゑんこれいいとわやしろれども人あと（おびさねのむくと早下しろ詞と）
給つとうと、おいしくろすり教えもんじつけ（細 ゆうきしこと）（盍 源し）
くいとあさましう例のとゆかしらまれのあ
おかそぬおやしきみろ人はこて（おそこうり源の詞まつむのるすとの）（細 今の教）

さすがにそらごとかしや
牡丹花云さすがに人はこゝ
まれなりけるものゝへら
がほしきことゝ
へつらすはいつらうせ
細 源の仁恕ある人
がしとおもひまゐらせて

おもしろの事 晩 末摘
のから衣とつゝみたまふを
まめし
物語云 孟 蒙談云の
事と源氏ふとおほしいへん
心ひく夢同の事こそ
物の我にみぬ物も見に
されぬとも
心わから 細 仮名にかき
さきとおもひこそまさ
世忘り入るやうにとも
孟 衣の物のやうなるとり
くハ然し

くれなゐやうにかうぞうのほうかあらひてもあかりくの入
りのつゝしうへんにひきつゝみこそいり
うちこそしけれ、さぶらふはそらごとのいれしや
まそかりけるいつくしくおぼえ
んちみとのいとくれしうおぼしたれ
ぐんはやさんいかとかうしれ人かなりと
おし給はこうらさのきとも御のわれ
とらの事あらなし
物おもへそうちかへしく衣おなじさ
りにけれぞと見えばたてはむりしつもあり
しとにとわりあふちなくとおかくらう
よろこうかくさまつ母くはなきりのくお
りしさとどえけんで給りぞこのかうさまに

まして今ハむかしにて時ハ
細 侍従ハとおもひし今なる
あやしくおもしと今なる
うのへんまへすて自身
若労しても侍従にまゐ
べきこと
とわせかりの人 晩 つま
らうち侍従のかはりて
ることをするそふし

から衣 細 或説のかるすハ別
まあるべし 此事ハ源の手
すかし唐衣と云事を
あけ、侍従のまゐる所こ花未
つひのまかし我おもふ乃
これからことらかの唐衣
し—— 或説にはつの事にも
し—— 或説にいふそ
とりふるなとゝ名人の物わ
まのから衣又からもく
きゝてふとあつらふ嗚
嗚の事く

つらん猶こそおかしていよはぢらゝくて
とこのかはりくへんとのとおもしけり給ふ
いかで此のとるすいざよひくとも我きんとの
まひくおやあつしへの心ひらうしたれんそ
へきそしてをわかめぐさことすれとも
くさまつきのひと
源
から衣またから衣から衣かへす〳〵も
から衣なるとていとまめやかに
のひとのたてゝこのむすぢなれば物して
侍るなりとて見せ給へばいとにほひやか
ひやかによろしうひろまつ、おほれいとみしかうじ
けれもかも侍りわひきれとらうしげ

やうかりし　細　源の心よ
入りたるも実よりても
すこし実家にてそこもる
ことゝいひなすさまのく
おもてん心は入給ふそとも
おぼしものゝことなく
ことうちもとも内大臣
なる古の師説
もらしきこえさせて　細　やゝ
のほの別いえにのうらう

なきのみなどかうかたいなしきを　松日記
すこしのゆかりや。宮の御かくいさゝかも
孟　内大臣の君の御ことを
いそがれ給ひしきはなれど。めづらしうよ
細　よく對面する人のやうに
思ひてある
ものし給ふ。猶いつしかと心もとなうおもひきこえ
松　宮にもの御法
廿六日裳着の日大宮の御方へ
じやう氣のおつりごとしきこえさせしとおぼいたりき
よるをそへてこ
つらよ。又すさまじくめづらしきさ宮にもてなされ給ふを
松　源の御心と内大臣の御ふみ
ませうげよりかゝはれたるかしめ給はり
いとしうさまふをとく。しけるやう抱りつる。やう
細　右對面の時し孟本にの時こそ
ありけてゆかさるゝいま時にそ内まいれ
これなりまへ
なる給倒のはゆくけをいさうりのしぞう
らの如りしいとよろしくあるべうをとうて流
されまつりとさるにおとるゝかくそ悲しいか
うらとしろうりへずうし　出ん気をそし　おりし

づくし実の實よりもはっ
みづからかゝりてんの
心そかはらぬしもるゝ
こゝろへし
こゝにおもひしる雲の
孟　是夜は夜ひ云られは夕霧
のすがたいとぬしおほかた
らの恨をとおもつる
あり
よろづのことかく　細　内大臣
の実父とおもふは末世の
の披露ある事はおほやけに
後源ふと源の物語にて
かぎりなきうしこゝろ
細　かくてかうのまゝ
こうしけるは源の
ことなり

こと絶よりてなしまくらいのしじうに
松　内大臣の御ゆかりの
孟　不意也
しかと思ひめしまへどと夜いとゆく
ことをさてまかなつりて
松　内大臣
ことゝ思ひもうかなるにかうて
花　裳のことを申せ
まうろんかれいひきもひ給ひ思しえ
の行こ
びさらに氣ときにおもしの如くしと夜
晴　源氏の行
松と内大臣のなしうて出行めさんとて
くいさつへ女御のしいらけ給ひしねばするよ
おろゝの
のおやかとりを給まじくまんこうきつね
人めもとゆかりてよそともつのれさわるがめし
細　内大臣の行源の御きぬを
御しまよげによくにことをやうとさ
師　孝の說
仰しもどうんれらくけましとぬよつづ
卯　記
いう文内大臣の御と
まうしこゆるとは世にしあらじやうこともや
孟　おとをまそ紙にみやせまく
えるせみづく今すくりくたびあさせさ
なと内府の御と
きひかり根もいうざそへ仰しさらんとさき

うつせみや 細 今こゝにて
ゑりかゝりて 孟内府の事也
冬みの御衣ハ露ぞむしろ なるせ
ぬかうめしきうく 河 業平
玉藻とよめり 花鳥
家の勝にまつけてきえろ
とらふせまをとらせ 黒豆
何せんにつてあそろめとも
ひりん仲信むもとりくる
みして
うりへるそ 細 [illegible]
べいつくともすのつくる
をうするさくより承もえ給ハ
ぎりしよしく 源の[illegible]
ハりりて [illegible]
えつり 孟此内府と あけさ
せきそねか [illegible]
まつし父の [illegible]
べき [illegible] 細
まうけせしと今まで [illegible]
ねまふね [illegible]
ねまふねと源の [illegible]
いふ根との [illegible]
所次 [illegible]

うえ給
内侍
うつめしやかうに川おもりくそぞ候ぐれ
ろおまのうろよそてあゆつてことあへとも
ちりきれ給ひわたいしぶしやうのもの
どりのさしつひつゝまえまゐらす
給へるのぞ殿 源
まうべるすゝこゝろすぎさにはかまへてあま
も弱ね藻く川とぞむし。いとよりみさけう
わつけぞくるゝかんとさてきべだ。いつくし
ひりよろんと。さてやうこそ内府のきみ
ぬ。みてらつさくへておゝしつかし
てきけさくへもあまさまれしつみれたゞ

雉も弱をも源の [illegible]
いとやりるき 細 今近弱のかね [illegible]
しもきみよとかる [illegible]
人々ねて あひしすを
細 兄弟ともきて いたみ
しりつきつらくらしハ父賞
のをくろしてるれハ姉し
くるつとし
うあへしうろ 細 大臣殿
のうまるくのそすをしま
るをとらりあむしこめ乃
やうにて人々みをとつく
さのせかなしきつてし

近弱のかねとよりこそちつくく 孟内府の子よ候かくれなうと
しとしまつと源のくさりくてらすすりし
このゆふぐれかたうちとけてはべる ないハいりうの
夕ぐくれくよらせ
しまよりとうさひとゆんつてまの歳れきぞら
細 中将ハ柏木也 孟此弁人ハ内府の子也と
中将弁のきみばかりぞ侍りけるに 御手
左のんすと
これぞ云ひしく候らうくもれりうと
左衛門の 弁ハうくぞ折出ずりろうくさうめ
きそ歳へしかり中うしのれこのまじとも
細 秋ね
めり。中将の中にひよきそて給ひろやか
かすしんなしなとのくいすとさてるへども
一條内大臣
まさうしてはんつのひしあひく。世よそさ
やうきさ海よりてあすかせきへなよでくも

こゝろざしもふかくと
ものなれ 忠業 内府の
嫡男を源の清盛とき
こえしの世なりけんこ
とどもこゝろにとゞまれ
あるし

おこゝろの人のえらびあれども
こゝろやすき所どの人にしもきこゆるよりと
とくも侍べりけれどもすくなくとも
まことの人のことしるやまさんへとあり
んよりはあらきこゝろをおぼしけるやうなく
人のをもおもしろきんなさしにはり侍べるべし
まの人はなれりてなしよりんをくをかしへ
あるべきことをぞれいしんぞしれおりがらき
れいなくよくゝろへ侍りけりもさきの世
思ひかりうすこしもまうおいとり給ひし
またもいれんとひきろくやさし
されどよりけてまいりこし思ありしが
しくくんよかしとせまくりてろのれ

いまはこゝろにかゝりまさる
ことありもあるを
お重盛卿のすてし嫡
男ももとおぼすまれ
さやかのふかくに今ま
で絶けしを今に
つけなりもあはれにおぼ
えのかなのおもしろくて
のせし
えさひそらしか今一度
参じてこと返すありと
源のふかし
ことば細のよりはお別の
ほどに世のさへまいりても
経盛へまいりしも清一度
の上をしもくも
あかなくつさとし
あはうらわかう 細源の
く今はかのお給はる
のありて給ひれてと
そわつめとらはやうまるを

うかどのよこゝろけり侍し名殿ともあれどとくどく
しきはあらびかをどいかすし思ひんに又いまは
こゝろけなりまへたくどこりけりをあるくさとせどく
おりとちをそくもくんどくらきりはれ気多
わつしくどめへさひもそしやうさくまかりとよ
るてつさひくあんにくぶ源のつしくくとと
そをむさびくくどもをそくてまさせ殿たつら
けどいはのかうりさ源をいりで侍やりよ
もそんを源のかれたうしく侍りかく
ずでうしくもてくよもそてよいしかりさどあまとり
くり侍りし思ひしうちにひさんて給はいませど
のわれ哀ともまくしてよもありしあかをけり女はせ

られもとりつてまゐり
お母宮のいやしきをうふ
おもきのぞけく 盍 女院
紙をとりつゞかしまゐら
けての御と

えつくへましいそぎ
御方へ宮仕へにまゐる
とりもていそぐ中の君の
ことなどもなくにおもし
とし

えしのうちあつけ
細 内府のゝうへ閑かるべし
東おもてにこそあるべき
みゝ聞書していふを
聞日

（細 内大臣 按察使）
うりはさゞるらうしのうたがひてゝ給き
ゑ世の人へおもてよおぼえしこのかしいでこゞ
（お 匂宮 兵部卿宮の事）
しそらはこゝまへどくらさうさゞさりのハ
世のひとなりなるぞわんよりひきしつく
やうくさゞておうらうとこのさゞれ物乃まし
（細 宮の御方）（盍 柏木之）（盍 紅梅之）
きこえ女御のかまへよ中ぬかねさふらひ
（盍 按察使 お 女八内府之むすめハおほかりし）
給まいくこそ殿はむすめあまたものしけさ御
（細 源氏内大臣之）
つるたりあれゆぞくやいろうる人ふさうさ
まりてるさうらん人きけべられも中ちつて
（細 真木柱 盍 具平親王之 盍 式部卿之）
ら姫ともおふるげよの給へ女御うこそらう
（細 柏木之）
てしと中わりて物との給へど中ね言う
（細 二貫にりてあまさうしんと云まう有り）
かしづくべきゆく人しもとのしまうつくしめでたし
（お まへ 思ふさまなれ）
とくがひしこし給くゆかりかく中いぞ
まぞ物のひさごなうぬ女房などもてそ
（細 宮の御方 盍 かく見ゆる物となし）
さしくもれしのまへはおもしろしうかれこそ
（お むすめのうるべきし）
ゆりうすつのうへよるうべきうりえあつくよ
とのそぎいくさうちいしとはさやう乃流
えうことやとてこそおぼえての女房達さ
まつうまうくねこもそ、おりつらつる
（盍 女房なども共に言のうちへ託し）
うまつれ流葉のつくしかりかまどたり
（柏木 我ならの包）
と服をくれバられかてあてそすいのうゑ
あればるまがしらこそののぞまんとこの給
（河 柏木之）
ひがうみちしみかりけりくれしののまよ
（盍 宮の御方之）
えしくぞうて、めでされ中まうぞまう

中將の君ぞつらく
お柳本の名出して今又
さらに噂をとゞろし

まくらもひろきわけより
同 史記曰目眦盡裂
樊噲が怒れる姿也
もとより[illegible]やすらう
細 逆に君ゑ[illegible]
へとも[illegible]
かねつ[illegible]こそも
細 かね[illegible]
ぐさめて[illegible]
お 女[illegible]
[illegible]も律ある書
の[illegible] 細 [illegible]
もさ[illegible]

ぬ人ハまづすがまづうらめしや中ねの君いぞつら
くぞくすかさう[illegible] 孟 [illegible]の紙をもひ出して[illegible]
わきまへのまゑ[illegible] お [illegible]
じきとのくらうれおもしろく[illegible]
うりへぶ[illegible]よいぶりし[illegible]てござる[illegible] 逆之
ゆくげをうけれどいとくろあげはま
じゑきなさあげうり中ねぞいふまつ
けそとげよしあやまりうろこそえんを 柳本の名也
まあやうして[illegible]しなかねとうり[illegible]
あくひるさ[illegible]を[illegible]
[illegible]
筆いそとも
いとほもあ[illegible]

[illegible]
あしめとくし 孫日本記第一云天照太神踏堅庭而踏股若沫雪以蹴散[illegible]
[illegible]悪行を天照太神の[illegible]
[illegible]のわきをうしてうきわ[illegible]庭をも[illegible]
しのふんく天照太神とそ[illegible]のみことい[illegible]今又[illegible]
[illegible]
[illegible]いまよう[illegible]

あずのいそとし 細 兄弟の[illegible]
この[illegible]
おかね[illegible]
と柏木ハ[illegible]に股立
[illegible]
[illegible]岩戸乃
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
と[illegible]

いまよう[illegible]時[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible] お [illegible]
[illegible] 孟 [illegible]
の義よおうしませ[illegible] 細 [illegible]
[illegible] 於下[illegible]
つ[illegible] 孟 雜役之

とをいひけるやうな
細 とも云ひつべきにし事と
とかくふうかうもしも 孟内
ひとつへふうかうけるとひ
孟 近江君の御の事と おか
内大臣の御心をやつくへ乃
やう大やけへはいかるもお
来せんとし。聞しての給
ふし

はやともくまだにあかうきつくこゝろさしをつく
しらく。とやつれてありそうて。内侍のつゝよみを
のれをかくすしきよとをめるうて由れゞいわきさ
しうかいかまふひく。いふくさあらんと咄わずに
ものにいかられ給へども。ゆかしげのぶところとこう
あそいとまれやうまならしひかそ。女院の御
こまをかりとうちへ参つどくよ。いづくこのお
かたの御こゝろとめせず。とてひとけき
やうまらくそ。出まうりいつくへうり渡
けるひ御かやけ。へるてけまいかまあひさん
内侍のうへに。とにいかりとものれまとくその
きざりしと。いとかやうかくのこゝろへでしやと

この女御とのこと
孟 女院どのゝうち御世使人
られんとおもひて御ことを
くれるとし 御同段の御
もつやしくくるとろ

はしめてしうかあかつきあき
おか内大臣御心おもよ近江君
御よ此女院殿を御ことく
れくとあらそうこと内侍
のうへをとさうへいはとそ
秋よ性よかのあまでさや
うまかかりあつく大へさ
まよあもそしへあかりけつかぞ

られしとおもく。きこえいかあ給はつしきお
しうわ給しかし。と乃女御殿なれども乃
つかし後まへさうてさを給そんとむのをと
かられくるすへさかつらひつるを。やうやつきく
ものおれ給やうりうて給ふれだ。慕あつりおきく
しうわがかし侍ゆくなんひよまきを孟
びやうくと
うちやらうり給ふしやしく自よ。きてさふらい
と抑。はやうさうり。思とのはあへうさと給ん
じさく。いはしあやしう咄むかりうちきさ腹く
せうかりや。きとゆかし乃給へいキうりはよづ
人のうちうりきそうしてせうし。ゆわらさ咄こう
のはもむとめ為んどとあすくとをとあうてよせあ

と近江君への御返事也と
まことしからずとよりつくり
てお言伝をとうむ御中
文をうつし也の女房は
中文ならうくるとある也
又唄しての事也
いくしく　細 師説也
し。今はよるどもいふ也
今案びくしくのびは
てゝ御説孟清濁義て
同しうたべし。びく用之
義也
うへはのふみには
咲みなどの様うすく
師より何とも見てた
いらぬしらすゆゑと
一書云　細 本人の御返
すにいふをうへていえん
とし孟人は返事をいそ
ぎへられまうてふ
なりと

しかさのこと
まかきんとはさうしめさぬやうあくざ
らゆめし。今までとか文をうつつみ。びく　哭点 細
しうるやいどされしゆゑうらくいなかゞし　孟
のんとんおんなんを御らんをんみはなちてく
ありませ給へじらんへはそのうらうりあなさけを
てもおちしませばなどいひしもうさすうし
あふ人乃ゆやげろすくうとまうりや。房は　細 孟
とさいおやしくもつゞけ給ふらんむ。　細 寺いつ中文也
むねしさうく乃ことくく。御よりさ
世給うずつまで乃やうふく。清らくを
とうふり給へんとく御給ふしもて
いふくさうしぬしたまへつよ。さまでの

世人は　細 おもしろき事也
人殊にくかしこまるよ
ましきるるとした世人
のまろうしぬもらぬ
をまぐくりしてうく
あ何かいまふと世の人めき御
すゞらをまずうしくく

うるどふくらく女房。とぬべく　おもしろく筆
ひくひかりゆへぬえもうりていてたん
かくまあげなか。女御さとれ比りくおうとて
まりあくことらやかしと比わしもとの　内大臣
近江君を笑ふまやうれかると　狂言云々
を抱むつうしき比りもおふを乃え
まそまろ何まうされしとく。ふうひ
ぐさまつらうさ。世人はちらかく
らうしまめ給ふなど。さ御ぐいひらり
くいふくもあり　暁 内大臣の近江君のよくしくぬ
明石の御方と世人のさ御くいふくし

上終